

26. 骨シンチグラムの有用性について ——重複胃症例への応用から

小倉 浩夫
(勤医協中央病院・放)
山崎 裕之 松崎 俊夫
河内 秀希
(同・内)
平尾 雅紀
(同・外)

1972年 J.G. Bickel らの報告など、パーテクネートと胃液分泌の相関については良く知られている所である。今回われわれは消化管重複症の中でも、特に稀な成人の完全重複胃の症例に応用できた胃シンチグラムについて報告する。症例は、32歳、男子、十二指腸球後部潰瘍を繰り返し、手術目的で入院、副胃からの胃液分泌が潰瘍の原因と思われ、主胃と十二指腸部の胃液検査は施行し得たが、副胃単独の胃液検査は施行し得なかった。主胃ならびに副胃の胃液分泌機能を知る目的で、パーテクネート 10 mCi を静注、胃部のイメージを1分ごと撮像、その変化を観察した。副胃側の胃液分泌の方が強く認められた。手術結果では副胃は体部腺のよく発達した胃であった。

ゾンデなどを全く用いない胃シンチグラムは、全く生理的状态で胃液分泌を観察し得るので、術後の逆流性食道炎など応用範囲は広いと考える。

27. 肝腫瘍における肝シンチグラフィと肝エコーグラフィの対比について

西條 登 山口 一行
田中 瑞穂
(留萌市立病院・内)
浦波 賢二 蛭名 豊
坂井 典夫 齊藤 勲
浜林 幸信
(同・放)
高橋貞一郎
(札幌大・放)
福田 守道
(同癌研・内)

正常時、原発性肝癌、胃癌の肝転移、肝嚢胞症の各症例において肝シンチグラフィと肝エコーグラフィの対比を行なった結果、肝シンチグラフィにて陰影欠損の認められた部位に、肝エコーグラフィ上異常エコーが認められた。特に嚢胞性疾患の場合はよく陰影欠損と一致した。肝腫瘍は肝シンチグラフィ上陰影欠損で診断されるが、正常肝においても Porta hepatis, 胆嚢窩等腫瘍による陰影欠損としばしば鑑別困難な場合があり、その点肝エコーグラフィとの対比はより診断の正確さを増すものと思われる。

28. 肝ヘルニアの1症例

山口 一行 西條 登
田中 瑞穂
(留萌市立病院・内)
福田 守道
(札幌大癌研・内)
高橋貞一郎
(札幌大・放)

肝ヘルニアは比較的まれな疾患で、しばしば胸郭内腫瘍、肝腫瘍と鑑別がむずかしい場合がある。今回、われわれは70歳男性で心不全症状を訴えて来院し、胸部 X-P にて右下肺野に横隔膜に接して腫瘍状陰影を認め、胸部断層、気管支造影では